連載

遠距離介護から見えてくる子どもこころ親どもこころ

――パオッコ活動現場より⑭

NPO法人パオッコ　～離れて暮らす親のケアを考える会～　太田差惠子

NPO法人パオッコは「遠距離介護」を行う人を支援する団体として活動しています。その多くは、年老いた親をサポートする子ども。子世代の中心は40～60歳代前半くらいです。

ある日のパオッコサロン（原則として毎月第2土曜日開催・8月はお休み）に、70歳代の女性が参加されました。

来るなり「うちは逆なんです」とおっしゃいました。彼女は関東圏に在住。30代半ばのご長男は遠方で暮らしておられていたのですが、脳内出血で倒れ、すでに4年も入院されているそうです。ご長男はシングルらしく、そのケアのため女性が飛行機で定期的に通っておられます。ご長男におりる障害年金は月8万円くらい。女性の収入は国民年金のみで5万円弱。親族の援助で、やりくりを続けているそうです。

子が遠距離で暮らす親を心配して通うことと、親が遠距離で暮らす子を心配して通うのとでは、大きな違いがあると思うのです。経済的負担はもちろん、肉体的な負担。女性は大病の可能性を抱えておられました。また、なにより相手への「思い」の深さの違い。女性は何度も言いました。「長男のことをおいては、死んでも死にきれない」。まったくその通りのお気持ちでしょう。

同じ日のサロンに参加した40代の男性の悩みは、比較的近距離に暮らす老母の介護のこと。老母は彼のきょうだいに代わって、知的障害のある孫の世話をされてきたそうです。しかしアルツハイマーを発症。投薬治療で比較的安定した状況のため、現在もその母親が、知的障害の孫の世話をしているそうです。彼にも妻や子がいます。そんななか、周囲からは「この状況を、どう考えているの？　あなたは長男でしょう」と言われることがあるそうです。遠まわしに「同居するべき」と責められている感じがするというのです。しかし、老母と同居するとなると、姪の世話をどうするかという問題も生じます。「家庭崩壊させるつもりなのか」と言いたくなるといいます。

「家族」や「介護」……。ひとくくりにしがちですが、それぞれの状況にはあまりに違いがあり、いつもながらその多様性を感じずにはいられません。厚生白書（平成10年）にはこんな記述があります。

「貧しい時代には、たくさん生まれた子どもたちも乳幼児期に死亡し、成人するころには平均して2人程度しか残らない。豊かになる過程の人口転換期では、以前と同じように子どもをたくさん産み、しかし乳幼児の死亡率は低下しているので、生まれた子どものほとんどが大人になるまで生き残る。現在の中高年世代の多くが郷愁を感じる、大勢の兄弟姉妹の中でもまれながら育つという家族の姿は、日本の伝統というよりも、人口転換期の世代にのみ特有なものと考えられる。」

豊かになり医療も進歩し、長寿になったことはすばらしいことなのでしょう。けれども、いま介護者となる世代は、きょうだいの数は2人くらいが一般的。多くが長男長女。さらに、必ずしも親が先に倒れるとはいえません。子が先に倒れたり、不幸にも亡くなったりすることも珍しいことではなくなりました。

この日のサロンには、運よく福祉の相談員経験が長く、ケアマネジャーとしても活動している女性が参加されていました。私たちは、福祉の専門職ではないためこのような難しい状況にどうこたえてよいのか分からず、悩むことが往々にあります。

ケアマネジャーの方は、ご長男自身に現在入院されている地域や病院にこだわりがないのであれば、何とかして、女性が暮らす地域の病院に転院させることがよいのではないかとアドバイスしてくださいました。70歳代という年齢から考えても飛行機での往復は負担であり、経済的にもあまりに厳しい状況が突きつけられているためです。女性は、すでに自分が暮らす自治体の障害担当の部署に足を運んだことがありましたが、リハビリテーション病院のリストももらえず、あまり親身にはなってもらえなかったため、現状維持が続いているそうです。ケアマネジャーの女性は、行政が不親切な場合は地元の障害者団体等に相談することもひとつの方法だと助言されました。

親を遠距離介護中の別の参加者からも意見が出ました。「役所には何度も行って、困っている窮状を訴えたほうがいい。何度もいえば、動いてくれることもある」と。途中、何度か涙を流していた70代女性は、少し勇気がわいてきたようでした。

介護や福祉に関して、自治体には必ず相談窓口があります。そのご長男の場合は、年齢的に介護保険の対象にはなりませんが、障害福祉の対象となります。ひと昔前は役所の対応は事務的で冷たいことも少なくなかったのですが、介護保険がスタートして以降、親切に対応してくれることが増えてきました。しかし、必ずしも、とはいきません。つっけんどんに返事されると、一般の方は……、特に介護で身も心も疲れている方には、こたえるのです。「もういい、自分で考える」と。結果自分ひとりで抱え込んでしまい、身体的にも精神的にもまいってしまうこともあります。

ケアマネジャーの女性はこうも助言しました。「市や地域包括支援センターに連絡したとき、必ず担当者の名前を確認するといいですよ」と。

一方、母親がアルツハイマーという男性は、これまでにも介護者の会などに参加したことがあるそうです。けれども、たいていそこに参加しているのは「同居介護」の人たち。同居で24時間体制の介護している人たちと自分の負担感を比較すると、悩みを話すことにためらいを感じるといいます。「在宅に比べたら、自分は楽をしているな」と罪悪感に似た気持ちになるというのです。そして、自身のことをわがままのようにさえ感じてしまうのです。しかし、何が良くて何が良くないか……。何が負担で何が負担でないか……。それは個人個人で異なるのではないでしょうか。誰かと比べて、「自分はわがまま」などと感じることはないと思うのです。介護に正解なんてありません。

パオッコをスタートして以来、さまざまな「家族」の話を見聞きしてきました。今回のように、親が子のところに遠距離介護するケース、要介護の親以外に障害のある家族がいるケース。実にさまざまな「家族」が存在します。

NPO法人パオッコ
～離れて暮らす親のケアを考える会～

親世代はできることなら生涯、住み慣れた家で住まい続けたいと望み、子世代も仕事や子どもの教育などを考えると、故郷に戻ることは容易ではありません。そんな状況のなか、親の心身に衰えが生じると子世代はどうしたものかと悩みます。
パオッコは「ひとりの経験はきっとみんなの役に立つ」という理念のもと、情報や体験を共有。ぜひ、ホームページに遊びにきてください！

〒113-0033 東京都文京区本郷3-37-8
本郷春木町ビル9F インキュベーションハウス内
ホームページ　http://paokko.org